【小説部門・奨励賞】

秒速十メートルの黒鬼

福岡県立香住丘高等学校　第３学年　澤畑　澪

　『せいや』
　誰かが俺を呼んでいる。
　怒号が聞こえる。悲鳴が聞こえる。
　鬼が、近づいてくる。
　俺はそれから逃れるために走り始める。
　止まってはいけない。振り向いてはいけない。ただひたすら前だけを見て走り続ける。
　早く、速く、疾く。

「……お前、相変わらずバケモノだな」
　膝をついて乱れた息を整えるオレとは正反対に隣で涼しい顔をして立つ一人の少年――樋口聖矢を見上げる。一見、普通の少年にしか見えない彼だが、そのすらりとした細い手足に実は強靭な筋肉が付いていることを、オレは知っている。彼は、彼が走り抜けた後には必ず一陣の強風が巻き起こされると言われているほど尋常ではないスピードを誇る短距離専門の陸上選手なのだ。当然のように様々な大会で優勝を果たしており、今この日本で、短距離走で彼に勝てるような男子は存在しないだろう、と囁かれているらしい。東北から転校して来たらしいが、初日から目立っていたのはその抜群の運動神経のせいだろう。
「……お前、絶対フライングしただろ」
　同じ陸上仲間とは言え、いまだに見慣れない、聖矢のもはや異様といってもよい速さに半ば呆れながらぼやく。
「してないよ。……むしろ、冬馬が走り始めた五秒ぐらい後に走り出したんだけどな」
　苦笑いと共に答えた聖矢は、重力を感じさせない身軽でオレの隣にヒョイッと腰を下ろした。そしていつものように二人で海を眺める。お互い何も言わないけれど、それは決して気まずい沈黙なんかではなく、むしろどこかホッとするような空気が漂っていた。ようやく息が落ち着いたオレは、そのまま後ろにばたりと寝そべり、空を見上げる。しばらく空を普段より速いスピ―ドで流れていく雲をじっと目で追いかけていると突然、「……ダメか」という聖矢の小さな声が沈黙を破った。
　はあ？　とオレは頭の中にハテナを浮かべて聖矢を見たが、聖矢は依然として前を向き続けており、今の言葉が本当に聖矢の口から発せられたものか分からなくなりそうだった。「……何がだよ」体を起こし聖矢の方を向いて聞いてみる。しかし彼は答える気が無いらしく、黙ったままだった。押し寄せてきた波が砂浜に打ちつけられる音が耳に響き、微妙な空間を隔てたオレたちの間を、湿り気を含んだ磯の香りが通り抜ける。

「……俺さ、」長い沈黙の後、聖矢がふと口を開いた。どうした？　と聞く代わりに聖矢に向かって小さく首を傾けて見せた。またもや不思議な沈黙が落ちる。ざわざわと何かの予感のように騒ぐ潮の音が胸の奥をくすぐる。
　遠くから近づいてきた一段と高い波が砂浜に打ちつけられようとしたときだった。
「陸上、やめるよ」
　聖矢は独り言のようにそう呟いて、サァーッ、と一斉に引いていく水際を見ていた。まるで聞こえなかったらそれでいい、と思っているみたいだった。さっきからの微妙な沈黙も、もしかしたらタイミングを見計らっていたのかもしれない。全く目を合わせようとしない聖矢の横顔を見ながら俺はふとそんなことを考えていた。そしてゆっくりと瞬きをして、聖矢と同じように海のほうを見やる。
　波が砂浜に打ちつけられてはまたもといた海へと引いていく、という流れを繰り返す間、お互い無言だった。三度目の打ちつけられる音が響き、生ぬるい潮風が吹き抜けたとき、オレはようやく、分かった、と一言だけ答えた。視界の端で聖矢がそろりと首を動かしてオレを見たのが見えた。
　あえて何も聞かなかった。彼の動作からして、オレに何かを聞かれたときの答えはもうすでに用意してあったのかもしれなかった。だけど、おれが本当に訊きたいことには、きっと何一つ答えない。そんな予感がした。喉の奥で引っかかっている言葉を飲み込み、ただ何事もなかったかのように揺れている海のかなたの方を見る。
「……そういえばさ」
ふとこの話とは別に気になっていたことを思い出し、口を開いた。
「海が見たいなら、なんでいつも曇りか雨のときに来るんだよ。海と言えば青空だろ」
　今聖矢とおれの目の前に広がっている海は、綺麗なエメラルドグリーンなどではなく、黒っぽく濁った、少なくとも綺麗、とはかけ離れたような色をしていた。
「黒い海が見たいからだけど？」
「……お前、何か病んでるの？」
　苦笑いして言うと、聖矢は、まさか、と肩をすくめた。そして、あ、と何かを思い出したような素振りを見せる。
「そういえば、明日、部活無いらしいよ」
「何で？」
「台風」
「ああ。でも、今日の夜じゃなかったっけ。明日は関係ないだろ」
「うん、まあ俺もそう思うけど、何か一応大事を取って、とか言ってたよ」
「ふーん……それより、オレたちここにいて大丈夫なわけ？台風来るんだろ」
「波は高くなるだろうけど、まあ、大丈夫なんじゃないの」
「……十分すぎるぐらい危ないだろ」
　聖矢の、のんきな発言にオレは苦笑いする。

　聖矢が、海を見てふと口を開いた。
「……津波の速さって、知ってる？」
「さあ？　相当速いイメージあるけど」
「オリンピックの短距離選手ぐらいだって」
「……速いな。今もし俺たちに押し寄せてきたら、確実に死ぬぞ」
「波と同じ速さで走れば助かるけどね」
「それができるのはお前だけだろ。……ていうか、そんな物騒な話、どこから聞いた？」
「陸上やってた兄貴」
　普段、自分の身内情報を明かさない聖矢の口から「兄貴」という言葉が出てきたことに、少なからず面食らう。
「……え、お前、兄弟いたの？」
「まあ……もういないけど。食われた」
「え？」
「鬼はね、秒速十メートルなんだって」
「はあ？　ますます分かんないんだけど」
「まあでも、今夜は……帰ってくるのかな」
　聖矢がまた、何でもないように、さらっと訳のわからない発言をする。いつものことと言えばそうなのだが。今日だって、「呼ばれてる」と呟いて、いきなり走り出したのだ。意味がわからない。首を傾げつつ、聖矢を見たが、聖矢は意味深に微笑むばかりでそれ以上は何も言おうとはせず、また海のほうを見た。
　しばらくして聖矢が、帰ろうよ、と言い出した。いつも通り、どちらからともなく走り出す。これまたいつも通り俺が負けて、「じゃあな」といって、それぞれの家へと向かう。

「じゃあね」
　冬馬に手を振り、背を向けて家へ歩き出す。
『聖矢』
　声に、ふと立ち止まる。またか。首を振って、振り向きもせずに歩き出すと、強く吹き付けた風が前髪をさらい、目元を覆い隠した。
『聖矢』
　……。立ち止まって、目にかかった前髪を乱暴に払いのけ、辺りを見渡す。……誰もいない。……当たり前だ。――だってこの声は。
　振り返って冬馬がいないことを確認してからしばし黙考の後、回れ右をして歩き出した。
　声が、呼んでいる場所へ。

　家に帰り、とりあえずテレビをつけてみると、暴風警報が出ていた。今夜は相当凄いことになりそうだ。どこか他人事のように考えながら煎餅を齧っていると、突然、手に持ったス

マホが震えた。表示されているのは学校だった。眉を寄せてスマホを耳に当てる。
「……もしもし？」
「おう、城崎か」
「あ、はいそうですけど」
　電話の向こうで苦笑いしているのは、陸上部の顧問だった。口調からしてそれ程重大なことではなさそうだと判断し、ホッとする。
「で、どうしたんですか」
「ああ、そうそう。明日、部活無いから、って言いたかっただけ」
「それ、もう聖矢から聞きました」
「え、お前、今樋口といるのか？」
「いや、今はお互い家です。……さっきまで海にいたんですけど」
「何でこんなときに海なんだ。危ないだろ」
「それ、聖矢に言ってください。僕は巻き込まれただけですから。聖矢のことは、俺でもいまいちわかりません。あれは多分兄弟ぐらいしかわからないんじぁないですかね？」
「……兄弟？」不思議そうな口調に変わる。
「あいつ、兄弟いないぞ」
「え？　でも兄貴がいるって言ってましたよ」
『鬼に食われた』
　ふと、聖矢が言っていたことを思い出す。

「――鬼って、一体……？」

「へ？　鬼？」
　首を傾げているのが見えてきそうな口調のあと、電話が切れた。通話が切れたスマホを耳に押し当てたまま俺は首を傾げる。
『黒い海が見たい』
『今夜は、……帰ってくるのかな』
　突然、聖矢の声がよみがえった。なぜかはわからない。その直後、ザワリ、と何となく嫌な予感がして、聖矢に向けてＬＩＮＥを飛ばした。いつもなら数秒で既読が付くのに、今日に限って、数分経っても付く気配がない。
　いや、待てよ。聖矢。お前、今どこにいる？
　ふと、風が吹いて、それに乗って微かな潮の香りが鼻腔をくすぐった気がした。記憶の中に真っ黒な海が見える。
　――そうか。お前、今、そこにいるんだろ？
　突然、辺りに閃光が走って雷鳴が轟いた。
　俺は、スマホをつかんでリビングを飛び出す。驚いたような母の顔が一瞬見えたので、「ちょっと行ってくる!!」と叫び、玄関のドアに体当たりするようにして外へと走り出した。目

指す場所は海。聖矢が今外にいるんだとしたら、そこしかない。今夜の台風で、海は真っ黒に荒れ狂うだろう。おそらく聖矢はそれが見たいのだ。この天気の中で、命の危険を冒してまで。なぜかは分からないけれど。

唇を噛みしめながら全力疾走する。景色がビュンビュン後ろに飛んでいき、ようやく視界が大きく開けて、海に出た。

いた。荒々しい轟音を奏でる波を目の前にして、ポツン、と一人佇んでいる後ろ姿。「――聖矢!!」大声で叫んだにもかかわらず、聖矢は、聞こえているのかいないのか、振り向かなかった。オレはそのまま聖矢のいる場所まで走っていく。風を正面から受けて目を閉じている聖矢の横顔が、はっきり見えるぐらいの距離まで近づき、聖矢、ともう一度呼んだ。聖矢は、聞こえてるよ、とでも言うように僅かにうなずいた。

「お前、何のつもりだよ!!」

聖矢に向かって怒鳴ったが、彼は俺の質問に答えることはせずに、代わりにゆっくりと目を開いた。その目は、ただ荒れ狂う海を眺めているだけではなく、どこかもっと、ずっと遠くの方を見ているようだった。

「津波の速さは、秒速十メートルなんだって」

轟音の中で、ギリギリ聞き取れるぐらいの静かな声だった。今はそんなことどうでもいいだろ、と言いかけたオレを遮るようにして、聖矢がすぐに口を開く。

「それじぁあ、助かるわけがなかったんだ」

要領を得ない聖矢の発言に、何が言いたいんだ、と心の中で苛つき始めたところで、ふと何かが頭の中で引っかかった。

『津波の速さは、秒速十メートルなんだって』

『鬼はね、秒速十メートルなんだって』

『食われた』

オレはハッと目を見開いて聖矢を見る。パズルのピースが組み立てられていくみたいに、様々な場面が繋がっていき、ある一つの仮説を浮かび上がらせる。

「お前……まさか」驚愕を読み取ったかのように黙って振り向いた聖矢の顔にはどこか寂しそうな弱々しい笑みが浮かんでいた。その表情を見たとたん、最後のピースがかちりと音を立てて填まる。全てが繋がって、だけどそして気づいてしまった事実があまりにも残酷でかけるべき言葉が思いつかなかった。言葉を失くしたオレに代わって聖矢が口を開く。

「そうだよ。俺の兄ちゃんは東日本大震災のときに死んだんだ。兄ちゃんだけじゃない。両親も友達もみんな死んだ。避難中、津波に巻き込まれて。……ずっと言ってなかったけどさ、俺、震災孤児なんだ」

「……」

「震災当時の記憶はあるときまでほとんど無くてさ。被災したのは俺が小学校低学年の時だったから、それも当たり前かな、って思ってた。だけど一年前ぐらいかな。ふとしたときにいろんな場面が蘇ってくるようになった。よく思い出すのは避難所でのことでさ。炊き出

しとかボランティアとかの人が体育館で走り回ってた。見ず知らずの優しい女の人がずっとそばで付き添ってくれてた。余震のたびにみんながびくびく震えてた。誰も迎えに来てくれない中、俺は一人でぼんや座り込んででいた。それであるとき両親が……」
　そこまで話したとたん、聖矢は一瞬言葉に詰まったように言葉を止め、しばらく黙っていた。しかしやがてゆっくりと海の方を見て、少しの間の後、また口を開く。
「両親の姿は結局見てないんだ。ただ、二人にかけられていたブルーシートをめくろうとしたら、隣にいた女の人に強く抱きしめられた。その人は黙って首を横に振りながら静かに泣いててさ。俺はただ茫然としたままブルーシートだけをじっと見てた」
　聖矢はそこでまた話をいったん止め、俺の方は見ないまま海の方をじっと眺めた。ふいに、昼間の彼の横顔を思い出した。そして、あの時も今も、彼は目の前の海ではなく、遠くの水平線でもなく、荒れ狂う波でもなく、もっと遥か彼方の手が届かない場所をずっと見ていたのだ、と悟った。
「最近、兄ちゃんのことも少し思い出した。学校のグラウンドで集まって避難してた俺のところに、急に兄ちゃんが来てさ。ここじゃ危ないかもしれないからもっと遠くに行くぞ、って言って俺を連れて走り始めたんだ。だけどそのあとの記憶だけは今もまだ完全に抜け落ちててさ。気が付いたときには俺はもう一人だった。兄ちゃんは結局遺体さえ見つからなかったんだ。……少し前から、突然兄ちゃんの声が聞こえてくるときがあるんだ。海の方から。名前を呼ぶだけだから何が言いたいのかは分からないけど。俺が走ろうとすると、いつも波の轟音と一緒に聞こえてくる。だから、走っていればいつかそのうち思い出すのかな、って思った。兄ちゃんのことを忘れないでいられるのかなって思った。……でもさ」
　聖矢が何かに耳を澄ますように目をつぶった。暫しの沈黙の後聖矢が緩やかに首を振る。
「実際来てみたら、いつも何にも聞こえなくなるんだよ」
　そしてオレのほうを見て、なんでなんだろうね、と諦めたように微笑んだ。それだけ言うと、オレに背を向けて、海とは反対の方向に歩き出す。今の聖矢には、どんな言葉も慰めにならないような気がしたオレは、必要な言葉だけを紡ぎ出した。
「……どこ行くつもり？」
「どこ行くって……家に帰るけど？」
　不思議そうにオレを見て、聖矢は、拍子抜けするほどあっさりとそのまま歩いていった。
　冬馬も早く帰りなよ、と残して。
　ポカンとしてその後姿を見やってから、オレは何度目か分からない苦笑をする。
「相変わらずマイペースというか何というか」
　どうやらオレの不安はただの杞憂だったらしい。だけど、無駄だとは思わなかった。オレがもしあの場で走り始めていなければ、きっと聖矢の過去を知ることはできなかった。聖矢が胸の奥でずっとため込んできたものを吐き出させることはできなかった。
　全てを吸い込んでしまいそうな真っ黒な海と向き合い、静かに手を合わせて目を瞑る。
　確か、あの震災では死者の約九割が、津波による溺死だったはずだ。この海が、かつて約

二万人もの命を瞬く間に飲み込んだのだ。『いつも波の轟音が聞こえる』という聖矢の言葉を思い出す。この海に追いかけられたことが、聖矢にはあったのだ。
　よく分からなかった樋口聖矢という人間が、そして、彼が陸上に強い理由が、少しだけ分かった気がした。

　風が横殴りに強く吹き付ける中、一人で夜道を歩いていると、閉じ込めていたはずの、【あの日】の記憶がよみがえった。
　兄に引っ張られた手。焦燥感と暗い覚悟が溢れた重くて押し潰されそうな雰囲気。後ろから響く轟音。けたたましく鳴り響くサイレン。泥よりも濁った、絶望を煮詰めたような真っ黒の液体。折れた脚を引きずって走っていた兄が「もうそろそろムリかな」と呟いて、繋いでいた俺の手を離した。俺は意味が分からなくて、首を傾げてただ兄を見上げた。
「聖矢」兄がいつものようにやさしく微笑む。
　とん、と背中に手が添えられる。
「聖矢の名前は、聖なる矢のように、っていう願いを込めて付けたんだってさ」
「え？」
「聖矢」その響きを懐かしむように兄が笑う。
　そして。俺が何かを言うより早く、兄が、俺を突き飛ばした。驚いて振り向こうとする俺に向かって、兄が叫ぶ。
「……振り返るな。走れ！」
　兄の遥か後ろで、黒い何かが蠢いているのが見えて、弾かれたように俺は走り出す。
「逃げろ‼　速く‼　もっと速く‼　波なんかに追いつかれるな！　……走」
　兄貴の声が途中で途切れた。その恐ろしい意味に気が付き、叫び声が口から漏れ出す。
「うわあああああああああああああ！」
　叫びながら走り続ける。後ろから、轟音が聞こえる。鬼が、追いかけてくる。
「……っ」
　現実に戻った途端、無意識に息を止めていたことに気が付いて、深呼吸を繰り返した。
『せいや』聞こえる。
『聖矢』聞こえる。……消えない。止まらない。頭の中に残り続ける兄のまぶしい笑顔と。
　黒い海と。
『走れ』はっと顔を上げた。走れ、と確かに聞こえた。聖矢、ではなく。そこで俺はようやく気が付く。俺にだけ聞こえてくる波の音と兄貴の声は――、
「兄貴からの、最期の応援だったのかな……」
　走れ。やめるな。恐れるな。強く、真っすぐ、どこまでも付き進め。聖なる矢のように走り続けろ。それが兄からのメッセージだったのだとしたら。いつの間にか溢れ出していた涙を拭い、俺は真っ直ぐ前を見据える。
　もう振り返らない。時空をも貫く一本の矢となって強くまっすぐ生き抜いていく。

地面を思い切り蹴り上げ、家に向かって一直線に走り始める。もうきっと、振り返ることはない。
鬼より速く。
波より速く。
聖なる矢のごとく。

俺の名前は――『聖矢』だ。